



Title	地域社会の標準語化に関する研究：南中国と香港をフィールドとして
Author(s)	陳, 於華
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42005
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	陳 于 華
博士の専攻分野の名称	博士 (文学)
学 位 記 番 号	第 14916 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 11 年 9 月 9 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科 日本学専攻
学 位 論 文 名	地域社会の標準語化に関する研究 —南中国と香港をフィールドとして—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教授 真田 信治 (副査) 教授 土岐 哲 助教授 渋谷 勝己

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、地域社会の標準語化の過程にはいくつかの段階があるのではないかという仮説のもとに、地域社会の標準語化が現在も重要な課題となっている中国の場合を事例として取り上げたものである。その中でも特に従来「方言障害が最も大きい」地域とされてきた福建省（福州）と広東省（広州）、及び標準語（普通話）化の初期段階にある香港を対象に、現地でのフィールドワークによって得たデータを基に、仮説を検証した。

人々の意識をたずねるアンケート調査や、直接の道聞きによる隠し録音調査を併用して実態を分析しているが、特に「道教え」場面での標準語の運用頻度は、福州 > 広州 > 香港の順であることが明らかになり、3 地域における標準語化の度合いが異なるといったアンケート調査での結果が裏付けられた。なお、標準語能力の低い地域ほど言語併用（コード切り替え）の現象が多く見られることも指摘される。

また、「道教え」場面におけるインフォーマントの発話の標準語度を評定し、各地域の人々の標準語使用能力を分析した。その結果、著しい地域差が認められた。3 地域のうち、福州の人の標準語能力が最も高く、広州の人のそれは福州に次ぐが、香港の人の標準語能力が最も低いのである。そして、標準語能力の地域差は各地域内の年齢分布にも現れ、福州では全体的に年齢が低いほど標準語能力が高くなるという向上の傾向を示しているのに対して、広州ではむしろ停滞の傾向にあり、香港では標準語能力の発達が社会活動の活発な年代と一致することが明らかになった。

さらに、談話資料を分析することによって、各地域で用いられている「地方普通話」を記述し、語彙・語法上の特徴の解明を試みた。標準語コードにおいては、3 地域ともにそれぞれの方言形式や方言的な構文を用いたり、もしくは標準語形に方言的な用法を持たせたりすることが観察されたが、それには地域ごとに異なった特徴が見られる。「福州普通話」として最も特徴的なのは、「有」構文の多用と形容詞の否定形に「不會」を用いることである。「有」構文の多用は「福州普通話」に限らず、「台湾国語」にも観察されるので、これはおそらく当該方言域の共通の特徴であると推測される。「広州普通話」と「香港普通話」の共通点は終助詞の多用であり、間投詞や感動詞とともに、発音も含めて、広東語のものをそのまま用いることがある。そして、標準語コードに英語の語彙が用いられていることが香港の特徴であり、「台湾国語」からの影響も見られることが興味深い。

そして最後に、標準語化の地域差、特に同じ社会制度にあって同じ時期に標準語化を始めた福州と広州との地域差をめぐって、言語的・社会的・経済的・心理的な側面から標準語化の進行にかかわる要因を分析した。そして、福州と広州とでは、地域方言のステータスと勢力、方言集団の経済的地位、人々のアイデンティティの強さなどが大きく異なり、それが標準語化の進行の度合いに影響を及ぼしたことを明らかにした。これらの要因は絡み合って作用しているが、中でも、地域の経済的地位への認識、地域に対する愛着度、そして当該地域人としての誇りなどが標準語の使用頻度に関与していることを統計的手法によって証明した。具体的には、次のようなである。地域方言のステータスと勢力が弱い上に方言集団の経済的地位が低く、人々のアイデンティティがあまり強くない福州のような地域では、標準語の受容（標準語化）はよりスムーズに進む。逆に、広州のようにそもそも地域方言のステータスが高く、それが方言集団の経済的優位性や人々の強いアイデンティティに支えられている場合、標準語は浸入しにくく、標準語化は遅れる、ということである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、社会言語学の研究分野での最も大きなテーマの一つである地域社会の標準語化の問題を扱ったものである。標準語化の問題は現在でも多くの国、とりわけ発展途上国において重要な課題である。中国では、日本における近代以降の国語（標準語）政策に刺激を受け、20世紀初頭の清朝末期から標準語政策を計画的に進め始めた。しかし、中国の言語事情や社会状況はあまりにも複雑なため、その標準語化は試行錯誤を重ねつつ、現在もまさに進行中である。問題の重要性の割には、中国ではその現状に関する実態調査がほとんどなく、理論構築も遅れている。本論文は、日本の標準語化に関する研究成果と理論を吸収し、その上に立って、中国での状況をフィールドワークによって詳細に解明、標準語化に段階性を見出した労作である。特に「地方普通話」の特徴を具体的な談話から抽出した点は高く評価される。その記述は語彙と語法に限定されているが、バラエティの豊富な音韻面での詳しい記述も是非ほしいところである。

本論文によって、実態データの少なかった中国の様相がはじめて明らかになった。標準語としての「普通話」が多くの地域社会においてH変種として確立しつつあるが、地域方言との差がきわめて大きいため、中国の標準語化は、今後も長い道のりを歩む必要がありそうである。香港の将来は特に目が離せないであろう。

なお、標準語化、あるいは共通語化というとき、日本での研究は、そのほとんどが方言コードの変容に焦点を当てている。しかし、申請者は、「地域方言の標準語への近づきについてはここでは言及しない」とはっきり述べ、標準語化を、標準語コードの受容者側に着目して、「そのドメイン（使用領域）の広がり、及びその使用能力の向上」と捉える。これは大変に興味深い視点である。また、地域的な標準語コードの構造を具体的に記述している点も日本側の研究に大きな刺激となるものである。

本論文は、未開拓の分野に果敢に挑戦した前衛的なものであり、博士（文学）の学位に十分ふさわしい価値を有するものと認定する。